

オンラインによる中国語授業の実践と課題

—通常授業からオンライン試験まで—

Online Practice and Assignments for Chinese Language Classes

—In Online Lessons and Online Examinations—

米井 由美

YONEI Yumi

要旨

コロナ禍により、2020年5月からオンラインによる授業を実施することになった。これまでGoogle Classroomのような学習管理システム、Google MeetやZoomなどのビデオ会議システムを全く使ったことがなかった筆者の奮闘の日々始まった。本稿では、筆者が担当する中国語科目を例に、オンライン授業においてどのような指導が可能なのか。その上でどのような問題に直面したのか、さらにその解決策について振り返った。同時に学生に対するケアについても考察を試みた。

また、コロナの収束が見えない中で、教場試験の実施もまた難しいと判断し、オンライン試験を実施するに至った。不正行為を防ぐために、パソコンともう一台の端末機器のカメラ2つを使用し、顔と手元を映しながら解答することを学生に求めたいのだが、経済的な負担がかかってしまうため、実現するにはハードルが高い。そのような状況において、どのようにオンライン試験を実施するべきか。そして実際に行ってみた結果、当日はどんなトラブルが起こったのかを実例を挙げて紹介した。

●キーワード：オンライン授業 (online classes) / 中国語 (Chinese language) / 授業実践 (practice)

I. はじめに

新型コロナウイルス感染症の拡大にともない、本学では各授業科目の開講時期がずれ込み、2020年5月11日(月)からオンライン授業が実施された。それまでの間は、情報IRワーキンググループの先生方が中心となって作成されたオンライン授業実施マニュアルなどの関連資料を見たり、筆者が所属する国際文化・観光学科内で行われたオンライン勉強会に参加したりするなどして、以後使用する学習管理システムのGoogle Classroom、ビデオ会議システムGoogle MeetやZoomの使い方を学んだ。そのおかげでICTリテラシーが十分だとは言えないレベルの筆者でも無事にオンラインによる初回授業を終えることができた。

本稿ではコロナ禍により2020年度と2021年度に実施された中国語科目のオンライン授業に関する授業実践記録とし、主に筆者が実施したオンラインによる通常授業と試験の状況やその上で見えてきた課題について述べていく。また、筆者はこれまでライブ型、オンデマンド型、そしてハイブリッド型(オンライン授業と教室での対面授業を組み合わせたもの)を3つの授業形態を経験した。

それらのことについても適宜紹介していきたい。なお、教員によって有する機材やスキルが異なるという点から、必要最低限だと思われることのみを扱うこととする。

II. オンラインによる通常授業(主にライブ型)

① 授業開始前の準備について

筆者が2020年度および2021年度に担当した中国語科目は以下の通りである。

2020年度は計7コマであり、内訳は水曜1限中国語I(国際文化・観光学科1年、計57名)、水曜2限中国語II(国際文化・観光学科2年、計52名)、木曜4限中国語I(短期大学部1年、計7名)、木曜5限基礎中国語I(ファッションクリエイション学科1年DEFクラス、計42名)、金曜4限基礎中国語II(造形学部両学科2年、計45名)、土曜2限中国語コミュニケーション(ファッション社会学科1年、計46名)、土曜3限スキルアップ中国語一検定対応—/中国語III(服装学部両学科、造形学部両学科各3年/国際文化・観光学科3年、計6名)である。

2021年度は計6コマであり、内訳は水曜1限中国語I

(国際文化・観光学科1年、計51名)、水曜2限中国語Ⅱ(国際文化・観光学科2年、計50名)、木曜5限基礎中国語Ⅰ(造形学部両学科1年、計60名)、金曜4限基礎中国語Ⅱ(造形学部両学科2年、計28名)、土曜2限基礎中国語Ⅰ(ファッションクリエイション学科1年ABCクラス、計35名)、土曜3限スキルアップ中国語一検定対応一/中国語Ⅲ(服装学部両学科、造形学部両学科各3年/国際文化・観光学科3年、計10名)である。

筆者は中国語科目をコーディネートする立場として、いずれも年度の途中で対面授業へ切り替わる可能性があることを考慮して、履修者数が教室の収容人数の半分以下となるように調整をした。それでもなお履修者が50～60名となるクラスもあるが、オンライン授業の導入によってより多くの学生たちを受け入れることができたのは良かったと言える。

次にオンライン授業を実施する上で必要だったものについて振り返ってみる。まずはパソコンである。筆者が使用していたのはWindows 10搭載のものであり、付属のMicrosoft Office、パソコン内蔵のwebカメラとマイクのみでオンライン授業に対応することができた。もしパソコン本体およびwebカメラやマイクに不調が見られるのであれば、思い切って買い替えることも検討すべきである。そして、作成した教材が保存してあるのはパソコンだけでは心許ないため、専用のUSBも備えておきたい。また、筆者は当初オンライン授業を無線LANで行っていたが、途中から有線LANに変更したところ、通信速度と安定性が劇的に増した。そのため、LANケーブルを用意しておくとうまいだろう。

中国語の授業では、簡体字(中国大陸で使用されている簡略化した漢字)の書き方について指導する機会が多くある。その際にタッチペンのようなものがあれば、Google Jamboardをはじめとするホワイトボードアプリを用いて板書して示すことができる。ただ、パソコンのタッチパッドにて指先で簡体字を書き示すことも可能であることから、タッチペンについては必要不可欠とまでは言えない。

ライブ型とオンデマンド型、授業形態を問わず、授業開始前にやらなければいけないことは教材作成である。準備のために相当な時間が割かれるところである。教材作成に際し、教科書の出版元へ使用許可をもらうために連絡した。その際、教科書の使用がどの程度まで許容されるかを確認した。出版元によって対応はまちまちであり、例えばA社は画面共有で用いるための教科書のPDF

データを提供して下さる代わりにこちらに利用許可申請書の提出を求める一方、B社は学内限定の学習管理システムで使用するという条件に利用許可申請書の提出は求めずに教科書のPDFデータを提供して下さった。いずれの場合も著作権の侵害にあたらないよう十分に注意していかなければならない。

こうしてようやく教材作成に着手することになる。筆者は教科書の本文だけは出版元から頂戴したPDFデータを使用し、文法の説明や練習問題の模範解答は自ら作成した。まずはWordで作成し、それをPDFにして画面共有の際に使用した。文法の説明や練習問題の模範解答については、学生たちに一度の画面共有ですべての情報を見てもらえるように文字の数や大きさを設定した。中国語(簡体字)のフォントはSimSunで24pt、ピンインは声調符号(音の高低を表すもの。四声)の見やすさを重視してArialで基本20pt¹⁾、和訳や解説はMS明朝で16ptとした。学生はオンライン授業をパソコンで受けているとは限らず、スマートフォンやタブレット端末などを使用して受講している学生も多い。そのことを念頭に置いておかなければならない。また、文字だけでは学生も飽きてしまうかもしれないので、空いているスペースに例文に合わせたイラストを載せた²⁾。作成した教材PDFの見やすさを確認するために、初回授業までにリハーサルと称して自身でビデオ会議システムを用いて画面共有のシミュレーションをしてみると良いだろう。その際は録画が必須である。

オンデマンド型の場合、教材作成を経て録画という流れになるのだが、録画の際は2つの「時間」に注意した。まず、いつ録画するのかという問題が挙げられる。筆者はよく日中の空き時間に教材を作成し、録画のためのまとまった時間を取ろうにもそれが夜間となってしまうことが度々あった。夜間、自宅で録画をすると音声反響し騒音になる恐れがあるため、注意が必要である。そのため、平日の勤務時間(9:00～19:00)か休日の日中に録画するように努めた。次に動画の時間配分をどうするのかという問題である。文法の説明や練習問題の解説、音読練習など、一つの活動につき、おおよそ20分間のうちにまとめるようにした。その際は手元にストップウォッチがあると便利である。何度も録画し直すことは大変であるため、途中で言葉に詰まることがあったとしても、気にせず進めるようにした。

② 通常授業について

本学のオンライン授業では、Google MeetかZoomのどちらを用いるかは自由に選択することができた。筆者は先述した通り、両方とも使えるように練習を重ねたが、シンプルで手軽に使えるという理由により最終的にGoogle Meetを選択した。学習管理システムはGoogle Classroomと決められており、Meetはそこに紐づけされているため、すぐに授業を開始できる点が便利だと感じたからである。

授業中、筆者は画面共有や音声の確認を兼ねて、操作しているパソコンのほか、スマートフォンかタブレット端末でもMeetに入っていた。しかし、パソコンのマイクがスマートフォンから流れてくる授業の音声を拾ってしまい、それが原因となってハウリングを起こしてしまうため、スマートフォンにはイヤホンを差し込むなどの工夫をした。

オンライン授業を行う上では、授業中のルールを決めておくことが肝要である。「授業開始時刻の10分前に「Meetのリンク」を表示させるので、開始までにMeetに入っておく」「カメラやマイクは指示があった時はオンにし、それ以外はオフにする」「授業は教員の許可なく録画（録音）してはいけない」「授業中の指名は出欠確認も兼ねているため、極力反応しなければならない」、筆者は初回授業にてそれらのことを学生たちへ伝えた。

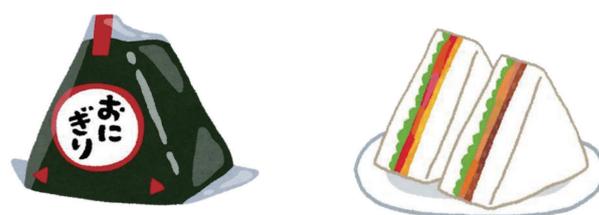
出欠確認はGoogle Formを使用する方法（指定された時間内に学籍番号や名前などを入力して送信する）を含め、いくつか試してみたが、どれも一長一短があると感じた。Google Formの場合、回答は送信されているものの、授業中に学生がきちんとMeetに入っていたかどうか疑わしいこともある。そのため、筆者は毎授業後に送られてくる「出欠レポート」を一番の頼りにしている³⁾。また、授業が終了したにもかかわらず、Meetに入ったままの学生（寝入っているのか中抜けしているのか、退出を忘れていたのかは不明）が各クラス一定数いることもあり、最後の確認としてチャット機能を使い、名前+「出席」を入力してもらった。先の「出欠レポート」と名前+「出席」の入力で出欠確認をしているが、履修者が多いクラスの分は整理に時間がかかるため、効率よく正確に行える方法を模索中である。

授業の冒頭は、筆者、学生ともにカメラをオンにし、コミュニケーションの機会を多く取るようにした。例えば、ゴールデンウィーク明けの授業の冒頭では、学生を指名して連休をどのように過ごしたのかを聞いた。授業中はカメラをオフで良いとした理由は、特に履修者が多

いクラスでは、全員がカメラをオンにすると回線が不安定になりやすいからである。学生がオンライン授業を受けている場所や環境、条件はさまざまであり、より負担が少ない形となるようにした。

毎回の授業は、単語→文法→本文音読練習および訳確認→練習問題という流れで進めている。つまり、一回100分間の授業で一課分を消化することになる。コロナ禍の前、2019年度に対面授業を行っていた時もその流れで行っていた。語学の習得は一朝一夕にはいかず、地道に勉強を続けていかなければならない。学習リズムを身につけてもらうために、授業の流れは固定している。

文法の説明では、予め作成しておいた教材PDFを板書代わりに用いる。教科書一課分には文法項目が複数含まれているため、一つの項目を終える度に学生に板書を写す時間を2、3分ほど与えた。筆者が独自で行ったアンケートでは、その時間ありがたいという声が多数寄せられた。また、PDFであれば手書きの機能を使って余白に簡体字の書き方を示すことができるため、対面授業での板書に近い形で授業を進めることが可能である。その他、学んだ文法事項をもとに会話練習も行った。例えば、「比」を用いた比較の表現では、おにぎりサンドイッチ、それぞれのイラストと値段（おにぎりは120円、サンドイッチは250円）を学生たちに見せ、どちらがどのぐらい安いのかを言う練習をした。（図1）



飯団 一百二十日元

三明治 两百五十日元

図1 おにぎりサンドイッチのイラストと値段

本文の音読練習では、まず教科書のPDFデータを画面共有する。ここでもやはりスマートフォンで受講している学生がいることを念頭に置き、本文の文字がはっきり見えるように拡大し表示している。本文の音読練習と文法事項の確認を同時に行うと学生も混乱してしまうため、先に音読練習を行うようにしている。基本的には筆者が読んだ後、学生たちは後に続くという（マイクはオフ）形である。最初はゆっくり読むが、二回目、三回目と回を追うごとにスピードを上げている。また、本文は

会話文となっていることから、学生を指名して筆者と一対一で読み合うこともある。

次は訳確認へと移る。ここでも学生を指名して一文ずつ中国語で読んでから和訳を言ってもらおうようにしている。この形で行えば、60名いるクラスでも二週間に一度は発言の順番が回ってくることになる。学生が本文を読んでいる時、筆者はその発音が正しいかどうかを確認する。その際は手元にクラスの名簿を置いて、発音の出来や学生の反応（きちんと発言したかどうか）を記録している。もっとも、発音を直す際は直接的な言葉で指摘するのではなく、「全体的にとっても良かった。ただ、この音はこうやって発音するともっと良くなる」というような表現を使うようにしている。特に1年生の場合、ほとんどの学生は中国語を初めて学ぶ上に、オンライン授業にも慣れておらず、緊張や不安を感じていることに配慮し、できる限り励まして勇気づけたいとの思いからである。

授業の途中、YouTubeにある中国語の歌のMV、ドラマや映画の予告編、バラエティー番組、北京や上海などの都市を紹介する動画などを流すことがあった。中国のドラマやバラエティー番組は字幕が付いていることが多いため、中国語の学習者にとってはとても助かることであろう。ほかには、旧正月をはじめとする中国の年中行事についても話をする場合もあった。勉強の合間の息抜きになったことであろう。しかし、その際の言動には気を付けなければならない。学生がオンライン授業を受けている場所は自室とは限らない。リビングにある家族共用のパソコンを使って受講している場合、その近くにはご家族がいらっしゃることもあるかもしれない。特に雑談をする際はその点を忘れてはならない。

学生への配慮という点で付け加えるのなら、画面共有を変える際も一言、声をかけるようにしている。画面が動くのを目で追っていると眼精疲労や頭痛が起こることがあるため、注意喚起という意味合いも兼ねている。

その後は練習問題を解く時間とした。一課ごとに練習問題（主に和文中訳）が4、5問ほど用意されており、解答時間を設定し（通常であれば5分間）、学生たちに解いてもらう。当初は練習問題を宿題とすることも考えていたが、100分間の授業内で解答と採点が収められることがわかったため、そのように進行している。採点では、まず一問ずつ学生を指名して中国語の文を読んでもらう。もし文法や発音に誤りがあったとしても、やはり直接的な言葉で指摘するのではなく、「頑張ったね」と

励ましつつ、「ここはこうしたほうがもっと良いかもしれない」と言うようにしている。

一通り口頭で確認した後は、筆者が作成した模範解答（ピンイン+中国語、注意事項などを記載）のPDFを画面共有し、全体で再度確認となる。ホワイトボードとタッチペンを用いて解答を板書していく方法もあるだろう。学生には採点が終わった後のノートやルーズリーフの写真を撮り、それを「課題」としてClassroomにアップしてもらおうように指示を出している。（図2）それは学生たちの受講状況や理解度を測るためでもある。提出期限は、午前中の授業であれば当日の23:59まで、午後の授業であれば翌日の12:00までとそれぞれ設定した。

2021年度水曜1限中国語Iの授業形態は11月まではライブ型、12月以降はオンデマンド型へ変更した。履修者からはオンデマンド型になったことにより、くり返して何度も再生することができるのは良いという声も寄せられたが、課題の提出遅延は全体的に増えた。

その要因の一つとして、オンデマンド型はより自己管理が求められるため、学習習慣があまり身につけていない学生にはハードルが高くなってしまったのだろうと考えている。筆者はリマインドメールを必ず出すようにした。

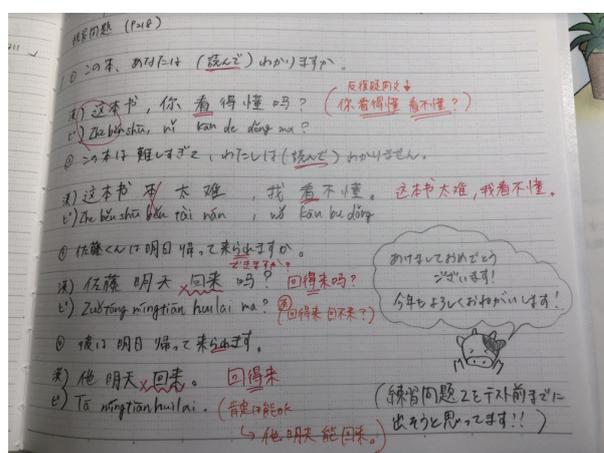


図2 基礎中国語II、学生のノート(写真は学生本人からの提供)

ハイブリッド型では、マスクの着用と手指消毒を含めた新型コロナウイルスの感染防止対策を徹底した上で行った。授業の流れはライブ型とほとんど同じである。教室内では千鳥配置を基本とし、各学生に座席を指定した。出欠確認は紙の出席カードではなく点呼とし、学生の状況は筆者の手元にある座席表に書き込むようにした。そして、板書の文字や音声の大きさは学生たちとともに確

認する必要がある。オンラインで参加している学生へ動画を配信する際はパソコン内蔵のwebカメラを用いるが、その場合はカメラの角度によって黒板の映せる範囲が限られてしまうため、どこまで映るかを確認した上でそこにチョークで線を引いておいた。板書の際はその枠内に収めるようにした。授業では音読練習が欠かせないが、マスクの着用という大前提がある状況では、練習中に息苦しさを感じたり、また双方の音声聞き取りづらかったりすることがあるため、ここでは練習を重ねたりはせず、帰宅後に教科書付属のCDや筆者が作成した音声ファイル（Classroomの「ストリーム」にて共有）を聞いて練習するように指導した。

Google Classroomについて言及すると、掲示板のような役割を果たす「ストリーム」をはじめとして、資料や課題を配信する際に時間の予約設定が分単位で可能な機能などは、オンライン授業を進める上でとても役に立った。ただ、予約設定は時間通りになることは少なく、数分から10分ほど遅れて配信されることが多かった⁴⁾。厳密な時間設定を要するものであれば、その点に注意しなければならない。

学生から質問があれば、授業後にMeetに残ってもらうか、あるいはClassroom内の「限定公開のコメント」やメールを使ってメッセージを送ってもらうようにして対応した。特に前期と後期の初回授業では学生からの問い合わせが多く、一つ一つ対応するのが大変なこともあった。学生に対しては、こちらからの返信は即日から3日ほどかかることがあるため留意してほしいと周知した。

中でも1年生の場合、ClassroomやMeetの操作方法に慣れておらず、授業中にメールなどで問い合わせが来ることあった。筆者は授業を進行している最中であるため、その手を止めて返信することはなかなか難しい。そのため、副手の先生方をお願いして、授業中の窓口となっていたことは、筆者にとって、大きな助けとなった。

コロナ禍であっても、多くの学生たちは中国語の勉強を頑張っていた。いくつかの例を挙げると、2020年度金曜4限基礎中国語Ⅱのクラスはとりわけ熱心な学生が多く、毎授業後に11名もの有志が集まってオンライン勉強会を実施したほどだった。そこでは先の授業で学んだところを範囲として書き取り練習を行ったり、ほかにも詩の暗唱や中国語圏出身の留学生も招いた交流会を実施したりした。また、毎週水曜日の昼休み、Meetにて留学生交流会が開催されている。参加者は国際文化・観光学

科所属の先生方と学生たちが中心となっているものの、他学部・他学科の学生の参加も歓迎している。このような機会を利用して、学生たちが学ぶ意欲を持続けてくれることを願っている。

Ⅲ. オンライン試験

筆者が担当している中国語各科目の評価方法について、2021年度のシラバスでは「試験30%、課題30%、平常点（小テスト、授業への参加意欲など）40%」と明記した。課題とは先述の通り授業内で解答と採点を行った練習問題のノートなどの写真の提出状況、平常点は遅刻や欠席を踏まえた出席状況や指名した際の反応、発音の出来（減点はせず、加点のみ）をそれぞれ指している。2020年度、2021年度とオンライン授業を実施した先生方の多くはオンライン試験実施の困難に直面したものと思われる。かく言う筆者もその一人だが、本稿を執筆している時点（2021年11月）までに、2020年度前期と後期、2021年度前期、計3回のオンライン試験を実施した。ここでは試験の内容と実施方法、さらには当日のトラブルについて述べていきたい。

① 試験の内容と実施方法について

オンライン試験の問題を作成する時に用いたのはGoogle Formである。インターネット上で検索したり、YouTubeの動画を見たりして、作成方法を学んだ。Google Formを使用して問題を作成することは簡単とまでは言えないが、慣れてしまえば教場試験で必要な試験問題の印刷や配布、答案用紙の回収や採点といった作業の手間を大幅に省くことができる。オンライン試験の問題点については後述するが、新型コロナウイルス感染症の収束がなかなか見えてこない現状では、評価方法を複数確保するためにも、オンライン試験を実施することは有効であろう。

いくつかの科目を例に挙げて試験の出題形式を振り返る。2021年度木曜5限基礎中国語Ⅰの前期期末試験（7/15実施）は大問1から大問7までであった⁵⁾。基礎中国語Ⅰや中国語Ⅰ、中国語コミュニケーションはいずれも1年生、つまり初学者を対象とした科目であり、出題範囲や形式に限界がある。実際には選択問題と中文（ピンイン）和訳の比重が大きかったが、大問4のように並べ替えの問題（単語をコピー・アンド・ペーストして正しい順番に並べる）や、大問6と大問7のように文法や発音に関する記述の問題も設定することができた。また、リ

スニング問題については、「Audacity」という音声編集が可能なソフトウェアを使用して作成する方法もある⁶⁾。

選択問題について言及すると、大問1は数字の正しいピンインを選ぶ問題、大問2は単語のピンインと意味の正しい組み合わせを選ぶ問題、大問3は文法の正誤を○か×（例. 我姓李傑。）で選ぶ問題である。予めGoogle Formで解答集を作成しておけば、選択問題の採点は一気に済む。

学生自身で答えを入力した大問5のピンイン和訳および大問6と大問7の記述の問題は、手で採点した。紙の筆記試験と同様に部分点を付けることが可能である。

次は2021年度土曜3限スキルアップ中国語／中国語Ⅲの試験の出題形式を見ていきたい。上級科目として位置づけられていることから、履修者の中国語レベルは高いため、出題範囲や形式には制限がほとんどなくなる。とは言っても、オンライン試験という状況下では問題の構成は基本的には他の科目とほとんど変わらなかった⁷⁾。今後この科目でオンライン試験を実施する際は、リスニングや書き取り、和文中訳⁸⁾の問題を取り入れることを検討している。

② 試験の問題点と当日のトラブルについて

最大の問題点は、試験中の不正行為を確認することは非常に難しいところにある。教科書やノートを見たり解答を検索したり、LINEなどを使って学生同士で解答を確認したりするなどの行為を防ぐことは困難である。さらに、Classroomに提出してもらった課題を試験中に閲覧できないようにする（一時的にロックする）というような機能はなく、不安を払拭できない。しかし、先述した通り、評価をする際の判断材料は一つでも多く持っておきたいということもあり、多少のリスクは承知の上でオンライン試験の実施に踏み切った。まさに性善説を信じるしかないという状況であろう。

オンライン試験を実施する日の前週の授業にて、注意事項の周知、Google Formを使用した解答の練習、カメラの動作確認を行った。注意事項には、試験中はカメラをオンにしたまま解答すること（マイクはオフ）、教科書やノートを見たり解答を検索したりするなどの不正行為は厳禁とすることを盛り込んだ。Google Formを使用した解答の練習は、選択と記述それぞれの問題サンプルを見て、選択や入力ができるかどうかを試すためである。カメラの動作確認については、一人一人に声をかけながらカメラで自身の姿を映すように指示を出した。中には

スマートフォンしかなく、解答中は画面が切り替わってしまうため、カメラで姿を映せなくなるという学生が各クラスに数名いた。その対応として、試験当日は他の学生たちとは違うMeetのURLへ入ってもらい、試験中はこちらから何度か点呼するのでそれに応じてもらう（その際、一時的にカメラをオンにして顔を見せる）ことで解決した。ここでもやはり性善説を信じるしかなく、オンライン試験実施の難しさを痛感した⁹⁾。

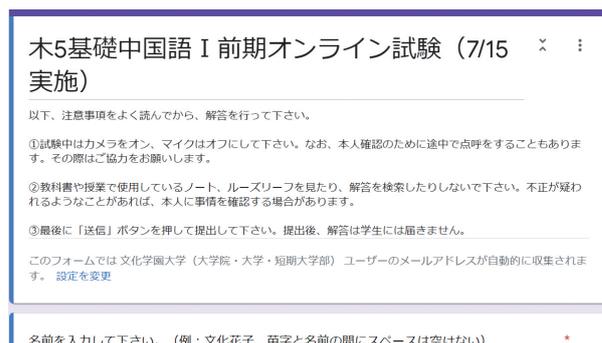


図3 オンライン試験の注意事項

オンライン試験当日は、まず全員にいつも通りにMeetへ入ってもらい、注意事項を読み上げ、カメラの映り具合を確認する。履修者が50～60名にもなるところは、クラス（国際文化・観光学科の場合、AクラスとBクラス）や学科（造形学部の場合、デザイン・造形学科と建築・インテリア学科）で人数を半分に分けた。一方はそのままMeetにて待機し、もう一方には別のMeetのURLを配信しそちらへ移動してもらった。試験中にカメラで顔を映すことができない、スマートフォンのみの学生はまた別のMeetのURLを案内する。筆者の経験では、このぐらいの規模であれば一人で対応できると感じたが、もし実施に不安を感じるようであれば副手の先生に監視のサポートをお願いしても良いかもしれない。

試験中、回線が不安定になり落ちてしまう学生も出てくる。そのため、試験開始後Classroomの「ストリーム」にて、それぞれのMeetのURLを貼り、そこから入り直すように案内を出している。

学生が解答を提出（送信）する直前に落ちてしまったということが、2020年度と2021年度それぞれ一回ずつあった。その場合はもう一度Meetに入ってもらい、再度解答をしてもらうか、次の授業が控えているなどの理由により双方で時間が足りない場合は別日に再度実施することにした。そのようなことがあるため、試験問題は

二つ用意しておいたほうが安心である。

また、次のようなケースもあった。学生がカメラをオンにしていると主張しているが、こちらの画面ではその学生の顔は映っていなかった。そのような時は、スマートフォンから参加している学生たちが入っているMeetの方へ入ってもらうように指示を出した。

不正行為の防止を含め、オンライン試験の実施方法は引き続き検討していきたい。

IV. 結び

本稿では、筆者がこれまでどのような形でオンラインによる通常授業(主にライブ型)と試験を行ってきたのかを述べてきた。

そこで見てきた課題として、(1) 出欠確認を効率よく正確に行うことができる方法の模索、(2) オンライン授業における学生のケアをいかに行うのか、(3) 学習習慣があまり身につけていない学生をどのように指導するのか(習慣づけるためには時間が必要である)、(4) オンライン試験を公平、公正に行うことができる方法の検討、以上4点を挙げる。

個人的に少々残念だと感じたのは、他の先生方のオンライン授業を拝見する機会がほとんどなかったことである。「授業改善アンケート」などで学生から評価が高かった授業などは是非録画を共有していただき、今後の参考とさせていただければありがたかった。オンライン試験についても、実施している先生は少なかつたかもしれないが、全学的に情報共有があれば良かったのではないかと思う。

オンライン授業を実施する上で、多くの方々に助けていただいた。オンライン授業実施マニュアルなどの関連資料を作成して下さった情報IRワーキンググループ(2021年度はオンラインアドバイザーグループ)の皆さまのおかげで、筆者はオンライン授業の基礎を学ぶことができた。そして、授業のサポートを快く引き受けて下さった国際文化・観光B研究室副手の下山実穂先生と小澤晴香先生、昨年度までお世話になった語学研究室副手の一ノ瀬珠里先生。いつも筆者を力強く支えて下さった非常勤講師の先生方、小寺春水先生、神谷智幸先生、柴崎公美子先生、耿函先生、昨年度ご退職された水原寿里先生。ほかにも、毎回の確なご助言を下さる諸先生方には大変お世話になった。この場をお借りしてすべての皆さまに厚く御礼申し上げます。

最後に、本稿を執筆する上でノートの写真をすぐに提

供して下さった学生をはじめ、協力的であり、また熱心に中国語の勉強に取り組んでくれた学生の皆さんにも感謝の意を表したい。コロナ禍が過ぎ去り、彼ら／彼女らに明るい未来がもたらされることを心から願っている。

注

- 1) Windows 10では声調符号が付けられなくなってしまったため、筆者は「在線漢語字典」という中国語サイト内の機能の一つである簡体字ピンイン変換、「中文転拼音」を利用している。<http://xh.5156edu.com/conversion.html> (最終アクセス日: 2021年11月15日) そこでピンインに変換されたものをコピー・アンド・ペーストしている。ただし、「我不是日本人。」Wǒ bú shì Riběnrénのように「不」bùの変調や「旅」lǚのウムラウトは正しく表示されるが、「旅行」の「行」はそのまま入力するとháng(「行」の異読音、正しくはxíng)と表示されるようなケースもあるため、教材に使用する際は十分に注意しなければならない。
- 2) 教材作成では「かわいいフリー素材集 いらすとや」<https://www.irasutoya.com/> (最終アクセス日: 2021年11月15日) が大いに役立った。
- 3) 「出欠レポート」は各学生のMeet入退出時間と合計の滞在時間が表示されるので、とても重宝している。一方、何らかの不具合によって、「出欠レポート」が届かないことがあった(2021年6月30日から7月7日までの間)。そのため、出欠確認は別の方法も組み合わせて行うことが望ましい。
- 4) 筆者は「予約を設定」ではなく、あくまで「下書きを保存」を選択し、配信する時間になったら手動で投稿を行った。投稿を忘れないための保険としては「予約を設定」も有効である。
- 5) 配点は、大問1が10点(選択、一問2点)、大問2が20点(選択、一問2点)、大問3が20点(選択、一問2点)、大問4が10点(並べ替え、一問5点)、大問5が30点(ピンイン和訳、一問3点)、大問6が5点(記述、一問のみ)、大問7が5点(記述、一問のみ)の合計100点であった。なお、平均点は77.63点だった。
- 6) 本学非常勤講師の柴崎公美子先生から情報をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。
- 7) 配点は、大問1が20点(選択、一問2点)、大問2が30点(中文和訳、一問3点)、大問3が20点(選択、一問2点)、大問4が20点(選択、一問2点)、大問5が10点(中文和訳・長文、一問のみ)の合計100点であった。なお、平均点は75.67点だった。
- 8) 本学非常勤講師の神谷智幸先生がご担当の火曜5限基礎中国語Ⅱ/中国語Ⅱでは、授業内で中国語のキーボード入力を指導されたとのことである。情報をいただき、ここに記して感謝の意を表したい。筆者が担当するクラスでも今後その練習を取り入れたい。
- 9) パソコンともう一台の端末機器(スマートフォンやタブレットなど)のカメラ2つを使い、顔と手元を映しながらオンライン試験を実施する形が一番理想的だと言える。しかし、それには経済的な負担が大きく、学生にお願いすることはあまり現実的ではない。